第１部パネル　分科会 8

共生型常設型居場所をどう広げるか

提言

いつでも誰でも
参加できる居場所を、
どのまちでも
身近なところにつくっていこう。

登壇者

【進行役】 鶴山　芳子　（公財）さわやか福祉財団理事

島村　孝一氏　（認定特非）きらりびとみやしろ理事長

塩澤　敏男氏　新潟市西蒲区第１層ＳＣ

砂塚　一美氏　柏崎市第１層・第２層ＳＣ

稲葉　ゆり子氏　（特非）たすけあい遠州代表理事

新川　好敏氏　（社福）曽於市社会福祉協議会地域福祉課長

■ 寄せられた声から

●「ありがとう」をまわす…いいなぁと思いました。

議事要旨　鶴山 芳子

地域のニーズは高いが実現は難しいという「いつでも誰でも行ける居場所」について３つの柱をもとに議論した。

● いつでも誰でも型の
立ち上げ運営のコツ、ポイントなど

「思いを持ち自然に」「空き教室の活用という行政の事業がきっかけ」「包括ケアを推進するモデルとして」「地域のニーズから」。登壇者は背景や思いは違うが、それぞれが躊躇することなく「いつでも誰でも型」を始めている。それは「誰でもできることがある」「人はみんな同じ」という考えがベースにある。そこは「したいことができる」「できることで参加する」から「遠慮なく参加しやすい」場でもある。そして「いない人の話をしない」というルールがあり、また「ありがとうが多いから前向きになる」場所であり「また行きたくなる場所」となっている。「みんなでやりたいことを共有し、お金もみんなで出し合う」が基本。支援する側とされる側がない場は居心地がよく「集めるのではなく集まる」という発言に皆で共感し合った。

● 既存のサロンなど月１タイプを常設にするには
どうしたらよいか

２地域のＳＣが事例を紹介。柏崎市は既存の月１サロンに行政が補助を出す仕組みがある。補助を出すだけでなく、ＳＣが地域に入りニーズを掘り起こし、ニーズのある地域でサポーター養成や勉強会を開催し立ち上げの支援をしている。20か所ある月１タイプのうち５か所が「いつでも誰でも」または「有償の助け合い」に発展している。また、新潟市ＳＣからは「月１では寂しい」の住民の声から、学校に働きかけるなど支援をし「いつでも誰でも型」に広げている。ＳＣらが住民の声をキャッチし、勉強会や座談会で様々な居場所の事例紹介や現場視察など情報提供し、行政が補助を出す等の後押しで「いつでも誰でも型」に広がっていることが見えた。

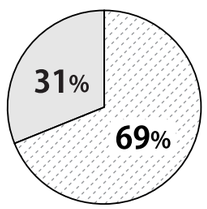
● 居場所から助け合い活動に発展させるには
どうすればよいか

年齢や障がいに関係なく、支援する側される側がない対等な関係は自然に助け合いも生まれやすい。「皆来館」（曽於市）では知的障がいを持つ引きこもりがちだった人が居場所で花の水やりをしたら「ありがとう」を言われたことが励みとなり常連となった。本人はもちろん家族や居場所でつながった人にも楽しさが広がった。

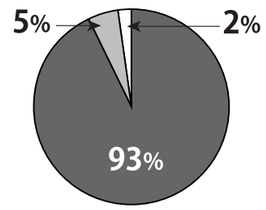
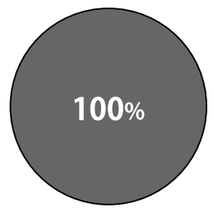
さらにそれぞれの居場所ではツールが入ることで頼みやすい関係に発展していた。「もうひとつの家」（袋井市）では「時間通貨“周”」で気兼ねなく「送迎」「調理」「繕い物」など、様々な助け合いが行われている。「“周”があるから安心」という高齢者も多い。「にしかん茶の間」（新潟市地域包括ケア推進モデルハウス）では「実家の手」というツールが、「くらしのサポートセンター」（柏崎市）や「陽だまりサロン」（宮代町）では有償ボランティアを推進し、つながりから「助けて」と言いやすい関係を広げている。子どもから高齢者まで地域の共生を広げる一番の近道が「いつでも誰でも型」であることを議論から改めて確認することができた。

アンケートの結果　参加者概数：90名　回答者数：62名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方